

光ミュージアム 研究紀要 2025

HIKARU MUSEUM

第 17 号

令和 7 年

一般財団法人 光ミュージアム

 HIKARU MUSEUM

目次

資料紹介

新収蔵資料紹介

《林檎の収穫》カミーユ・ピサロ（重要美術品）	2
光ミュージアム 学芸員 稲垣幸祐	

光ミュージアムのコレクションから見る北斎芸術

「富嶽三十六景展」によせて	4
光ミュージアム 学芸員 柳瀬米希	

報告

総合博物館における科学教室の実践報告

一大学との連携による3年間の取り組みー	11
光ミュージアム 坂倉瑤子	

新収蔵資料紹介

重要美術品 カミーユ・ピサロ 《林檎の収穫》

光ミュージアム 学芸員 稲垣幸祐

当館が新たに収蔵したカミーユ・ピサロの《林檎の収穫》は、カミーユ・ピサロが印象派から新印象派へと向かう実態を具体的に示す点で注目される。ここでは本作と関連作品の概要を整理し、広く共有することを目的とする。



カミーユ・ピサロ 《林檎の収穫》

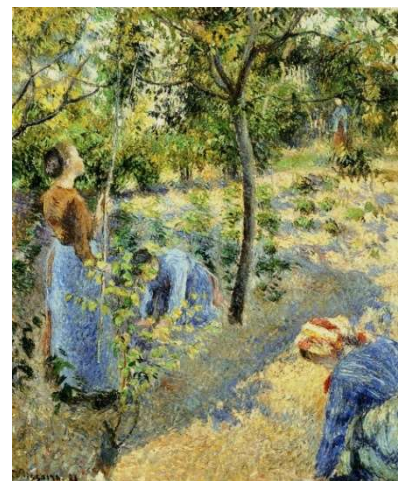
1882年 光ミュージアム蔵

《りんご採り》あるいは《林檎の収穫》の変化について

1882年に制作された《林檎の収穫》は、カミーユ・ピサロが印象派から一步踏み出し、新たな絵画表現を模索する中で生まれた。彼はこの《林檎の収穫・りんご採り》という主題に1881年から86年にかけて取り組み、3つのバージョンを残している。本作はその2作目にあたり、変化の過程が垣間見える重要な一点である。

第1作——印象派らしいやわらかな光

第1作の《りんご採り》（1881年、個人蔵）は、やわらかな自然光に包まれた農作業の様子を描いたもの。動きのある構図や筆致には印象派の特徴が色濃く表れているが、ピサロはこれに満足できず何度も構想を練り直した。



カミーユ・ピサロ 《りんご採り》1881年 個人蔵

第2作——収穫の喜びと表現方法の模索

2作目である本作（1882年、光ミュージアム蔵）では、地面に転がるりんごと、「りんごを食べる女性」を新たに加えたことで、農作業の風景に生活の潤いと豊かさが

表現され、構図がより洗練されている。

人物のしぐさにも変化が見られ、棒で木を揺らす女性の姿は、腕や首の角度にまで細やかな検討の跡がうかがえる。また、技法にはテンペラを用い、モチーフを単純化し平面的な描写を試みている。

第3作——新印象派への歩み

3 作目（1886 年、大原美術館蔵）では、画面を正方形に改め、2 作目の構図を基に新たな展開が試みられた。新印象派の技法である点描の導入である。色彩理論に基づいて配色された筆触により、より明るく調和の取れた画面が実現されている。

3 つのバージョンに共通するのは、農民の営みに対するピサロの温かなまなざしである。産業化が進む時代にあって、自然とともに生きる人々の姿に価値を見出し続けたその眼差しは、画風が変わっても変わることはなかった。



カミーユ・ピサロ 《りんご採り》1886 年
公益財団法人大原芸術財団 大原美術館蔵

移行期を象徴する作品として

《林檎の収穫》は、印象派から新印象派へと向かうピサロの移行期を象徴する作品群の一つである。とりわけ本作は、構図・技法ともに両時代の要素を併せ持ち、美術史の中でも重要な位置を占めている。

以上、新収蔵したカミーユ・ピサロの《林檎の収穫》について概観した。本作品は今後の精査により多くの知見をもたらす可能性を有しており、収蔵・公開を機に、今後のカミーユ・ピサロに関する調査・研究がさらに深化することを期待したい。

参考文献

深尾 茅奈美 「カミーユ・ピサロ作《りんご採り》に関する考察：描かれた理想社会と「総合」のための絵画様式」『京都美術史学』第 5 号, 京都美術史学会, 2024 年, pp.37-69

『カミーユ・ピサロと印象派—永遠の近代—』宇都宮美術館・兵庫県立美術館, 2012 年

〈資料紹介〉

光ミュージアムのコレクションから見る北斎芸術

「富嶽三十六景展」によせて

光ミュージアム 学芸員 柳瀬米希

1 はじめに

本稿では、令和7年に光ミュージアムで開催された特別展「葛飾北斎 富嶽三十六景展」¹における展示解説を手がかりに、当館が所蔵する北斎作品の魅力と特徴について紹介する。

2 葛飾北斎と「富嶽三十六景」

葛飾北斎は江戸時代後期を代表する絵師であり、その作品は日本国内のみならずヨーロッパ美術にも大きな影響を与えた人物である。90回を超える転居や30回以上の画号変更など、多くの逸話を持つことでも知られる。90年の生涯のうち約70年を画業に費やし、3万点以上の作品を残したといわれる。

北斎の代表作「富嶽三十六景」は、1831から1834年頃にかけて制作された36景図+追加の裏富士10図からなる浮世絵版画シリーズであり、富士山を主題としている。本シリーズは版元・西村永寿堂から出版され、当時の江戸社会において大きな人気を博した。その背景には、江戸後期の安定した社会状況と庶民文化の成熟、街道整備による旅行ブーム（伊勢参りや富士講など）の広がりがあったと考えられる。名所を視覚的に楽しみたいという需要と、富士山という象徴的テーマ、さらに比較的廉価で入手可能であったことが相まって、本シリーズの成功を支えた。

3 波の表現について

本シリーズの革新性を象徴する作品が「神奈川冲浪裏」である。神奈川冲浪裏は、海外において“The Great Wave”の名で広く知られ、極めて高い評価を受けている作品である。画面に描かれた3隻の船は押送船と呼ばれ、江戸へ生鮮食品を運搬するためのものである。小さく表現されているものの、船にしがみつく人々の姿からは、大波の激しさと切迫した状況が的確に伝えられている。



葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川冲浪裏」

また、本来雄大に描かれるべき富士山をあえて小さく配することで、前景の波の圧倒的な迫力を際立たせている点も重要である。

¹ 会期 令和7年2月27日～12月21日。「富嶽三十六景」46点のほか、「日・龍・月」などの肉筆画もあわせ、全50点を展示した。

このように、本図は荒れ狂う波と静かに佇む富士山との対比、すなわち動と静の対照を通して、雄大な自然とそれに向き合う人間の小ささを巧みに表現している。

作者である葛飾北斎は、生涯にわたり多様な波の表現に取り組んできた。例えば、三十代後半の作とされる狂歌絵本『柳の糸』の一図「江島春望」では、波は比較的穏やかでありながら、その内部構造まで丁寧に描写されている。四十代半ば頃の「おしおくりはどうつうせんのづ」では、大きく立ち上がる波が見られる一方、全体としては平面的な印象が残る。五十代後半の『北斎漫画』七編「阿波の鳴門」では、激しくうねり渦巻く波が描かれ、動勢が一層強調されている。さらに六十代前半の『今様櫛捻雛形』では、砕け散る複数の波の表現が試みられている。

そして七十代初頭に制作された本図において、これらの試行錯誤は一つの到達点を迎える。その後も、七十代前半の「千絵の海 総州銚子」では粗削りながら力強い波が描かれ、七十代半ばの『富嶽百景』二編「海上の不二」では、本図に近似しつつも、さらに激しい波しぶきの表現が追求されている。このように、北斎の波の描写は、初期の穏やかな表現から次第に高さや動勢を増し、波頭や飛沫の描き方にも多様な工夫が重ねられてきたことが確認できる。

本図において特筆すべきことは、藍の濃淡と白のみを用いた簡潔な色彩表現である。とりわけ、鉤爪のように鋭く反りかえる波頭の造形は、恐ろしさと同時に美しさを兼ね備えた独自の表現として結実している。その描写は、あたかも高速度撮影によって捉えられた一瞬を思わせるほどのリアリティを備えている。精密な観察力と卓越した描写力を有する北斎だからこそ、このような瞬間の表現が可能であったといえよう。

4 色彩表現の特徴一ベロ藍

また、「富嶽三十六景」の大きな特徴の一つとして、「ベロ藍（プルシャン・ブルー）」の使用が挙げられる。この顔料は18世紀にヨーロッパで発見され、日本には18世紀半ばに輸入された。従来の植物由来の青に比べて発色が鮮やかで退色しにくく、濃淡表現にも優れていたため、浮世絵に革新をもたらした。この影響により藍一色で摺られた「藍摺絵」が流行し、本シリーズにもその特徴が顕著に見られる。

「甲州石班沢」は、甲府盆地を流れる笛吹川と釜無川が合流し、富士川となる地点付近に位置する急流地である。画面には、その激流が岩に衝突して激しく荒れ狂う様子が生き生きと表現されている。前景には異様に突き出た岩場に立つ漁師が網を打つ姿が配され、その傍らには魚籠をのぞき込む子どもの姿が描かれている。



葛飾北斎「富嶽三十六景 甲州石班沢」

構図に注目すると、岩場から漁師の体、

さらに投げられた網へと連なる要素によって三角形が形成されており、この形態は遠景にそびえる富士山の姿と相似形な関係を成している。このような幾何学的構成は、北斎が好んで用いた特徴的な表現の一つである。

また、富士山の輪郭線には趣きのある本藍が用いられ、その内側には透過的で繊細な青色を呈するペロ藍が施されており、両者の使い分けが視覚的な奥行きと質感の差異を生み出している点も見逃せない。

なお、本図は後摺に属し、漁師および子どもの着物、岩の色彩などに変更が認められる点も重要である。

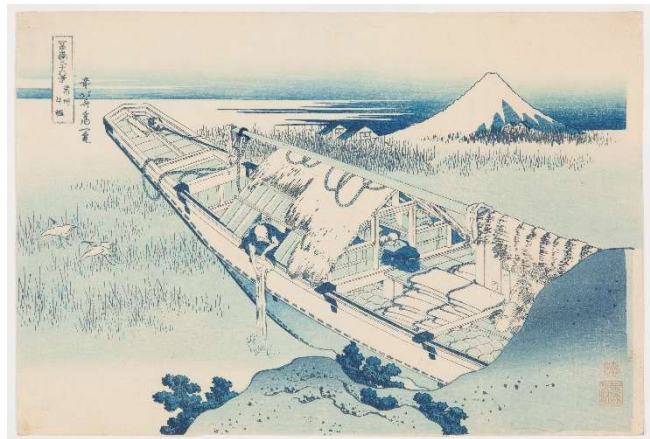
「常州牛堀」に描かれる牛堀は、現在の潮来市に位置し、霞ヶ浦の出入り口にあたる水運の要衝であった。この地域では船による物流が盛んであったが、霞ヶ浦は強風時に渡航が困難となるため、牛堀には風待ちの船が停泊する習慣があったとされる。

画面に描かれた船は高瀬舟と呼ばれ、

利根川水運において重要な役割を担った大型船である。長距離の航行に備え、船首付近には板屋根で覆われた炊事場兼寝所が設けられていた点も特徴的である。

本図では、船から身を乗り出した男性が、自炊の際に出た米のとぎ汁を水中に流す場面が描かれている。その水音に驚いた二羽の白鷺が飛び立とうとする瞬間が捉えられており、静寂の中に生じる一瞬の動きが印象的に表現されている。

さらに、画面は藍の濃淡を基調として構成されており、この簡潔な色彩表現によって、早朝の静けさの中に響く水音や羽ばたきの気配が一層強調されている点も注目される。



葛飾北斎「富嶽三十六景 常州牛堀」

5 各作品にみる表現の多様性

「凱風快晴」は、富士山が朝焼けによって赤く染まる稀有な瞬間を捉えた作品である。この現象は一年のうちでも限られた条件下でのみ見られるとされ、本図はその印象的な情景を象徴的に表現したものといえる。一般に「赤富士」の通称で知られ、観る者に強い視覚的印象を与える作品である。

画面構成は極めて簡潔であり、赤く染まる富士山の岩肌、鰯雲が広がる青い空、



葛飾北斎「富嶽三十六景 凱風快晴」

そして緑を帯びた裾野の樹海という三つの要素によって成り立っている。これらは主として三色の色彩によって表現されており、その限定的な色数にもかかわらず、豊かな視覚効果を生み出している点が注目される。

このような簡潔かつ大胆な色彩構図は、当時の錦絵においても際立った特徴を示しており、視覚的な鮮烈さにおいて他に類を見ないものであった。そのため、本図は国内のみならず海外においても強い関心を集め、驚きをもって受容されたと考えられる。

「山下白雨」では、画面の大半を占める富士山が、きわめて珍しく黒を基調として表されている点がまず注目される。この特徴から、本図は一般に「黒富士」の愛称でも知られている。山体を覆う黒は、麓に立ち込める雨雲を象徴的に示したものと考えられ、さらに右下に稲妻を描き添えることで、激しい夕立の到来が強調されている。



葛飾北斎「富嶽三十六景 山下白雨」

一方で、山頂付近には明るさが残され、晴天を思わせる表現がなされている。すなわち本図では、一つの画面の中に対照的な気象状況が巧みに取り込まれており、その対比によって富士山の雄大さと空間的広がり、より印象的に視覚化されているといえよう。

「駿州江尻」は、東海道十八番目の宿場である江尻宿付近の街道から富士山を望む情景を描いたものである。画面では、富士山麓に特有の強風を思わせる気象が表現されており、空高く舞い上がる懐紙や、笠を押さえながら前かがみに進むとする人々の姿が、目に見えない空気の流れを巧みに可視化している。



葛飾北斎「富嶽三十六景 駿州江尻」

このように本図において北斎は、風景のみならず人物表現にも優れた力量を示しているが、その背景には、人物を描くためにはまず人体の構造理解が不可欠であるとの認識があったと伝えられる。実際に北斎が画力向上のため接骨院に弟子入りしたという逸話は、彼の写実への強い探求心を示すものとして興味深い。

「甲州三坂水面」は、甲州三坂、すなわち現在の山梨県に位置する御坂峠から河口湖方面へ下った先の湖畔より望む富士山の景観を描いたものと考えられる。画面には、静かな湖面に移り込む逆さ富士が表されているが、その位置は実像の富士とは上下対称の位置には置か

れず、やや左方にずらされている。しかしながら、この構成は視覚的な違和感を生じさせることなく、むしろ画面に独特の調和をもたらしている。

さらに注目されるのは、実像の富士が雪を戴かない夏山として描かれているのに対し、水面に映る逆さ富士は雪を頂いた冬の姿として表されている点である。水面の反射という表現を巧みに活用し、一画面の中に異なる季節の富士を共存させる発想は、北斎の卓越した構想力を示すものといえよう。



葛飾北斎「富嶽三十六景 甲州三坂水面」

「東海道金谷ノ不二」は、東海道二十四番目の宿場である金谷付近から望む富士山と、大井川の渡河の様子を描いたものである。金谷は、大井川西岸に位置し、同川は東海道屈指の難所として知られていた。幕府により架橋や渡船場の設置が禁じられていたため、旅人は川越人足の肩車や蓮台に乗って渡るほかなく、増水時には通行が制限されるなど、往来には多くの困難が伴ったと伝えられる。



葛飾北斎「富嶽三十六景 東海道金谷ノ不二」

こうした背景を踏まえつつ、本図において北斎は、大井川を単なる静かな流れとしてではなく、うねるような波と水飛沫を伴う動的な存在として描き出している。水流に抗いながら川を渡る人足たちの姿には、迫力と躍動感がみなぎっており、当時の渡河の過酷さを強く印象づける表現となっている。

さらに、本図にはシリーズ最多となる百二十人以上の人物が描き込まれており、その精緻な描写を支える彫りと摺りの技術もまた、見どころの一つといえよう。

6 肉筆画と北斎の思想

「日蓮上人像」は、昨年の展覧会で「富嶽三十六景」とあわせて公開された肉筆画であり、北斎の信仰的側面をうかがう上でも注目される作品である。北斎の門人・露木為一筆「北斎仮宅之図」には、柱に釘付けされた蜜柑箱の中に日蓮像が祭られていたことが記されており、このことから北斎が日蓮宗の信徒であった可能性が指摘されている。²

² 飯島虚心『葛飾北斎伝』巻二、蓬枢閣、1893年、露木為一筆「北斎仮宅之図」解説。「阿栄の傍らの柱には、蜜柑箱を少し高く釘づけになして、中には、日蓮の像を安置せり」とある。

画面は黒一色の背景を基調とし、その中に端座して読経する日蓮上人の姿が浮かび上がるように描かれている。右上には「南無妙法蓮華經 日蓮大菩薩」と記され、さらに画面下方には「安立山 日蓮」との款記が認められる。この「安立山」とは、浅草に所在する長遠寺を指すと考えられる。同寺には、日蓮上人自作と伝えられる像が奉安されており、北斎はこれを実見した上で本図を構想した可能性が考えられる。

また、寺伝によれば、江戸時代後期に二度の火災で焼失した堂宇の再建に尽力したのが日蓮上人であったとされる。長遠寺には、かつて北斎筆「日蓮上人小松原御難の図」が所蔵されていたとも伝えられており、北斎と同寺、あるいは日蓮上人との間に一定の関係があったことが推測される。



葛飾北斎「日蓮上人像」

三幅対「日・龍・月」は、左幅に霞の中から深紅に輝きながら昇る太陽、中央に暗雲の間に姿を見せる龍、右幅に朧げな三日月を配した構成からなる作品である。いずれも細長い本紙に描かれているにもかかわらず、それぞれの画面には奥行きと広がり巧みに表現されており、三幅が一体となって雄大な空間を創出している。

自然現象と想像上の存在とを組み合わせながら、簡素な要素によって豊かな世界観を構成する点には、北斎ならではの卓越した構想力がよく表れている。なお、本作には「画狂人北斎」



葛飾北斎「日・龍・月」

の画号が認められることから、その制作時期は北斎が四十代前半から半ば頃にあたると推定される。

「豫讓」は中国の春秋時代、晋王朝の公卿・知伯に仕えた忠臣である。敗死した主君の仇を単身討とうと試みるが果たせず、ついには自決する。自決する前に仇の衣服を譲り受け、それを斬りつけることで主君の無念を晴らした。本図は豫讓の最期を描いているが、話と異なり、放たれた矢に自ら胸を開く豫讓の



葛飾北斎「豫讓」

姿が描かれている。北斎は歴史的人物の最期を独自の解釈で描き、晩年の表現の深化が示されている。

本作には「八十七老卅筆」の署名が認められる。八十代になっても意欲的に作品制作に取り組んでいたことがうかがえる。

7 おわりに

北斎は晩年、「あと数年あれば真の絵師になれる」と語ったと伝えられる。この言葉は、既に高い評価を得ながらもなお自己の芸術に満足せず、探求を続けた姿勢を象徴している。

「富嶽三十六景」はその探求の成果であると同時に、なお発展途上にある芸術家としての北斎の姿を示す作品でもある。

本稿では、光ミュージアムにおける特別展「葛飾北斎 富嶽三十六景展」の展示解説を手がかりに、同館所蔵の北斎作品の特徴と魅力について検討した。とりわけ「富嶽三十六景」を中心に、構図や色彩表現、主題の多様性を概観し、北斎が長年にわたる試行錯誤の末に到達した表現の特質を確認した。

また、ベロ藍の導入による色彩表現の革新や、動と静の対比、幾何学的構成といった造形的工夫に着目することで、北斎作品が単なる風景表現にとどまらず、視覚的效果と象徴を兼ね備えた高度な芸術であることを理解することができた。特に、ベロ藍は浮世絵で使われていた植物系の「つゆ草」や渋い青色の「本藍」にはない鮮やかで透明感のある青色を生み出し、それまで表現が難しかった海や川、空の描写に新たな可能性をもたらした。さらに、肉筆画に見られる署名や主題の多様性からは、晩年に至るまで旺盛な創作意欲を持ち続けた北斎の姿勢をうかがうことができる。

以上のことから、「富嶽三十六景」をはじめとする北斎作品の造形的特徴や表現上の工夫について理解を深めることができた。また、今回の展示を通して、北斎作品が今日まで高く評価され続ける理由の一端を確認するとともに、その美術史的意義と魅力について改めて考える機会となった。こうした点は、晩年まで理想の表現を追い求めた北斎の姿勢とも深く結びついているといえるだろう。

参考文献

『葛飾北斎 江戸から世界を魅了した画狂』美術手帖編 BTBOOKS

『江戸十八大浮世絵師 ビジュアル版 絵師から入る浮世絵の世界』深谷富士男著 河出書房新社

『もっと知りたい葛飾北斎』東京美術

『作って発見！日本の美術2 土偶も！北斎も！応挙の子犬も！』金子信久著 東京美術

『世界に誇る 日本の伝統文化 はじめての浮世絵2』深谷富士男著 河出書房新社

『ジュニア版もっと知りたい世界の美術1 浮世絵を変えた江戸の人気画家 北斎と広重』

『浮世絵の名品に見る「青」の変遷』松井英男 監修・編集 印象社

『江戸のジャーナリスト 葛飾北斎』千野境子著 株)国土社

『北斎への招待』朝日新聞出版

『THE 北斎 富嶽三十六景 ARTBOX』講談社

『「北斎の衝撃」天才絵師が世界に与えた絶大なる影響とは』和楽ムック 小学館

〈報告〉
総合博物館における科学教室の実践報告
—大学との連携による3年間の取り組み—
光ミュージアム 坂倉瑤子

1 はじめに

当館では教育普及活動の一環として、日本大学理工学部大久保尚紀教授³の協力を得て令和5年より地域の子どもたちを対象に夏の「科学教室」を開催してきた。科学的な視点に触れる機会を提供するとともに、博物館を学びの場として活用してもらうことを目的としたものである。本報告では3年間にわたり実施した科学教室の概要とアンケートの結果をもとに今後の展望について述べる。

2 科学教室の開催概要

2.1 科学教室の内容

- ・ハーバリウム（植物標本）を作ろう 講師：大久保尚紀

電子レンジの仕組みを学び、その場で電子レンジを使いドライフラワーを作る。事前に用意しておいたドライフラワーと光ミュージアム内に生えている草花を組み合わせ、好みのハーバリウムを作った。

- ・尺八体験&ウィンドチャイム作り 講師：大久保尚紀、樋口景山⁴

都山流尺八学会大師範 樋口景山先生に尺八と当館所蔵のレプリカの石笛を生演奏していただいた。その後、子どもたちは練習用の尺八で音を鳴らす練習をした。また、授業の後半では音階の仕組みを学び、大久保先生よりパイプカッターの使い方のレクチャーを受け二人一組で切ったアルミパイプを吊るし音階を作った。その後、カットしたアルミ管を用いてウィンドチャイムを一人一つ作って持ち帰った。

- ・地層を学ぶ&ミニ地層作り 講師：大久保尚紀、柳瀬米希

飛騨展示室にて当館学芸員の柳瀬より飛騨地方の地層について解説をおこなった。その後、大久保先生より地層ができる仕組みをサイズの異なる砂の粒子を使ってわかりやすく伝えていただいた。最後に三種類の砂のサイズから、それぞれ好きな色の砂を選びミニ地層づくりを行った。

- ・うす墨にみるペーパークロマトグラフィー 講師：大久保尚紀、福永明子⁵

展示中の現代書、また岐阜女子大学書道部の淡墨の書を鑑賞し、その墨が持つ特徴を観察し

³ 日本大学理工学部一般教育教室 物理系列/教職系列 教授

⁴ 都山流尺八 大師範

⁵ 日本画家

た。そして自分たちで実際に薄墨を作り膠の持つ性質や墨、日本画について学んだ。授業の後半では、いくつかの会社の黒い水性ペンを用意しペーパークロマトグラフィーの実験を行った。ペーパークロマトグラフィーの原理を応用し型抜きをしたろ紙を色付けし、しおりにして持ち帰った。

2.2 科学教室開催日程・参加人数

〈令和5年〉 1テーマ／18名

「ハーバリウム（植物標本）を作ろう」

日程：7月31日(月)

対象：小学4年生以上

参加者：18名

〈令和6年〉 2テーマ／34名

「ハーバリウム（植物標本）を作ろう」

日程：8月16日(金)

対象：小学4年生以上

参加者：19名

「尺八体験&ウィンドチャイム作り」

日程：8月19日(月)

対象：小学3年生以上

参加者：15名

〈令和7年〉 4テーマ／24名

「地層を学ぶ&ミニ地層作り」

日程：7月31日(木)

対象：小学2年生以上

参加者：12名

「うす墨の書に学ぶペーパークロマトグラフィー」

日程：8月1日(金)

対象：小学4年生以上

参加者：2名

「水の重要性とハーバリウム作り」

日程：8月16日(金)

対象：小学4年生以上

参加者：3名

「尺八体験&ウィンドチャイム作り」

日程：8月19日(月)

対象：小学3年生以上



写真1 科学教室の様子



写真2 科学教室の様子



写真3 科学教室の様子

参加者：7 名

3 アンケート実施方法・内容

アンケートは令和 6、7 年において、科学教室の終わりに参加者にアンケート用紙を配布し
その場で回答してもらい用紙の回収をおこなった。

アンケートの設問内容は下記のとおりである。

Q1 光ミュージアムに来たのは何回目ですか

- ①今回が初めて ②2 回目 ③3 回目 ④4 回以上

Q2 光ミュージアムでの科学教室への参加は何回目ですか

- ①今回が初めて ②2 回以上

Q3 今回参加しようと思ったきっかけはなんですか

- ①学校で配られたチラシを見て ④ホームページを見て
②親や家族にすすめられて ⑤インスタグラムを見て
③友達が参加すると聞いたから ⑥その他（ ）

Q4 好きな教科はなんですか

- ①国語 ②社会 ③算数 ④理科 ⑤音楽 ⑥図工 ⑦体育 ⑧その他

Q5 体験した実験・観察で一番おもしろいと感じたことは何ですか

Q6 体験した実験・観察で一番勉強になったことは何ですか

Q7 今日のような体験学習があればまた参加したいと思いますか

- ①ぜひ参加したい ②参加したい ③参加したくない ④どちらでもない

Q8 体験した実験観察以外にやってみたい実験観察はありますか

Q9 今日の感想を書いてください

4 アンケート結果・考察

Q1光ミュージアムに来たのは何回目ですか

58 件の回答

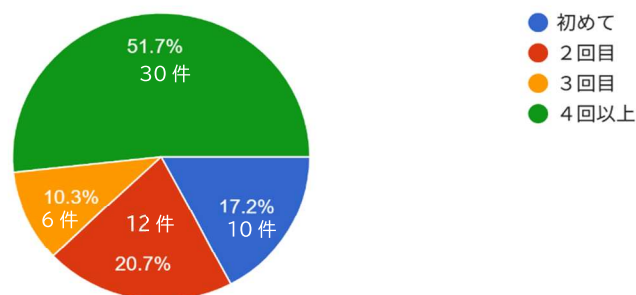


図1 Q1 アンケート結果

Q2光ミュージアムでの科学教室への参加は何回目ですか

58 件の回答

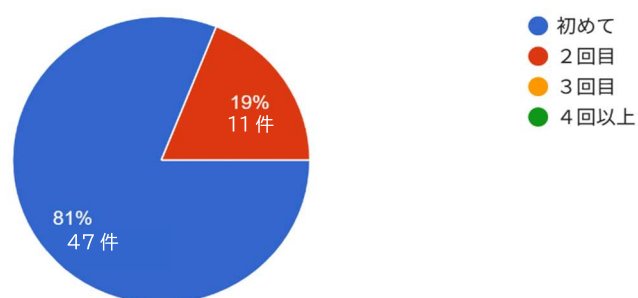


図 2 Q2 アンケート結果

Q3今回参加しようと思ったきっかけはなんですか

58 件の回答

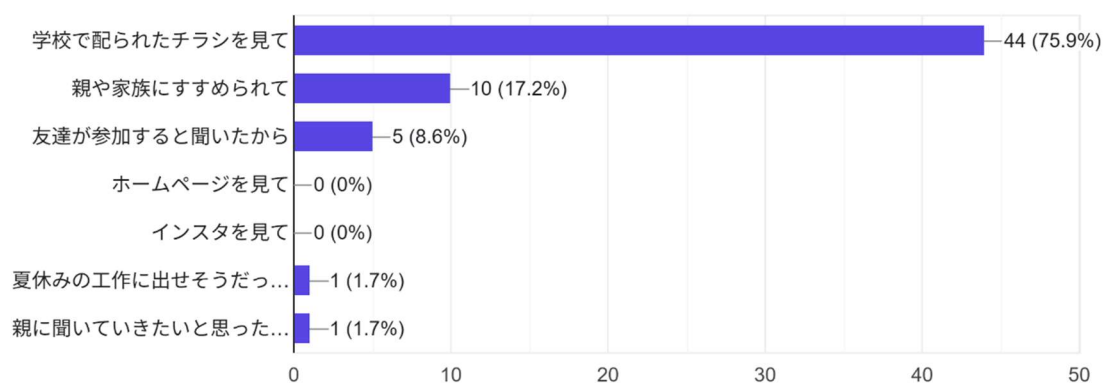


図3 Q3 アンケート結果

Q4好きな教科はなんですか

58 件の回答

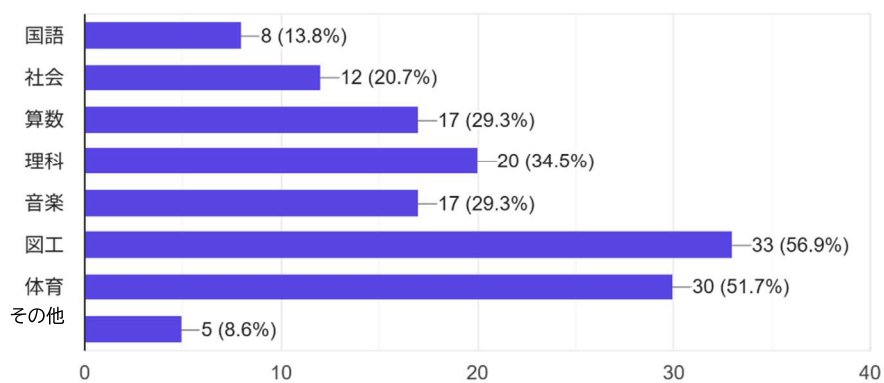


図 4 Q4アンケート結果

Q7今日のような体験学習があればまた参加したいと思いますか

57 件の回答

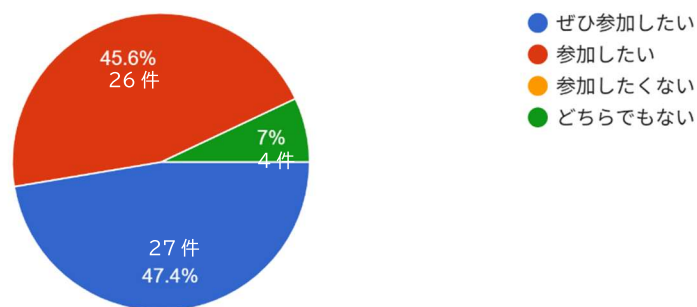


図 5 Q7 アンケート結果

アンケート結果より、いくつかの傾向が見られた。「Q1 光ミュージアムに来たのは何回目ですか」の設問において「複数回以上」と答えた参加者が全体の 82.8%と多く見られた。このことから、当館に対する継続的な来館者が一定数存在していることがうかがえる。一方、「Q2 光ミュージアムでの科学教室への参加は何回目ですか」の設問においては「初めて」と回答した参加者が全体の 81%を占めていることから、既存の来館者に対して新たな体験の機会を提供できていると考えられる。

次に、「Q3 今回参加しようと思ったきっかけはなんですか」の設問で、参加のきっかけとして学校を通じたチラシの影響が大きいことがわかった。地域の教育機関との連携が参加者獲得において重要な役割を果たしていることがわかった。今後も、学校と関係を築くことで、より効果的に展開ができる可能性があると考えられる。

また、「Q7 今日のような体験学習があればまた参加したいと思いますか」という設問において大多数の参加者が肯定的な回答を示していることから、本科学教室は高い満足度を得られていると考えられる。

また、自由記述においては、「Q4 体験した実験・観察で一番おもしろいと感じたことは何ですか」の設問について「尺八を吹く体験」「パイプを切る作業」「花を瓶に詰める作業」など実際に手を動かす体験に関する記述が全体の大半を占めた。また、「油を入れると花が大きく見えた」「粒の大きさで落ちる速さが変わった」など、科学的現象の変化への驚きに関する記述が 18 件、「最後にカラフルな地層ができたこと」「すみが広がっていったこと」「植物がこんなにきれいに標本になったこと」など音や色彩、美しさなど感覚的な要素への反応の記述が 16 件あり、美術的・造形的な体験を伴う内容が参加者の興味関心を高めていたことがうかがえる。

続いて、「Q6 体験した実験・観察で一番勉強になったことは何ですか」の設問については、「水が一番温まる」「水分を抜くと軽くなる」「長さによって音が変わる」など科学的現象への理解の記述が全回答の約半数を占め、「尺八の吹き方」や「飛騨の地層の展示解説」など音や自然に関する学びへの記述も多く見られた。また特に、予想と異なる結果に対する驚きは強く印象に残っており、科学的現象への理解や興味関心を深める契機となっている。

たと考えられる。

さらに注目すべき点としては、参加者の「Q4 好きな教科はなんですか」の設問にたいして、理科のみならず図画工作や体育といった教科が上位に挙げられた。このことは、科学教室が必ずしも理科に高い関心を持つ層に限定されたものではなく、より幅広い興味関心を持つ参加者に受け入れられていることがわかった。特にプログラムで実施したハーバリウム作りのように、美的要素や造形的な体験を伴う内容は、理科への興味の有無にかかわらず参加しやすく、結果として科学への関心の入口として機能していると考えられる。

以上の点を踏まえると、本科学教室は、単なる知識習得の場にとどまらず、科学に対する興味関心の裾野を広げる役割を果たしているといえる。とりわけ、美しさや表現といった要素を取り入れたプログラムは、美術館という場の特性を生かした科学教育の一形態として有効であると考えられる。今後も大学との連携をはかりながら、科学教室を継続して実施し、引き続き多く子どもたちに科学と芸術への関心を広げる学びの機会を提供できるよう努めていきたい。

5 おわりに

本科学教室の実施にあたり、多大なるご協力をいただいた先生方に深く感謝申し上げます。本教室のきっかけは、筆者が大学在学中に大変お世話になった大久保先生と、久しぶりに再会したことにあります。先生が大学でも小学生を対象に科学教室を開いておられることを伺い、当館でも同様の機会を提供できないかお願いしたことから、本教室の実施が始まりました。先生方には、3年にわたり企画・運営・指導にご尽力いただき、子どもたちにとって充実した学びの場を提供していただきましたことに、心より御礼申し上げます。

令和 7 年 光ミュージアム 研究紀要 第 3 号

令和 8 年 5 月 31 日発行

編集・発行 光ミュージアム

〒506-0051 岐阜県高山市中山町 175

TEL 0577-34-6065

FAX 0577-34-6065

<http://h-am.jp>